

感染症人間学の創成とネクスト・パンデミックへの提言

	研究代表者	長崎大学・熱帯医学研究所・教授 飯島 渉（いじま わたる）	研究者番号：70221744
	研究課題情報	課題番号：26A101 キーワード：感染症、パンデミック、アーカイブズ、記録と記憶、価値の形成	研究期間：2026年度～2030年度

なぜこの研究を行おうと思ったのか（研究の背景・目的）

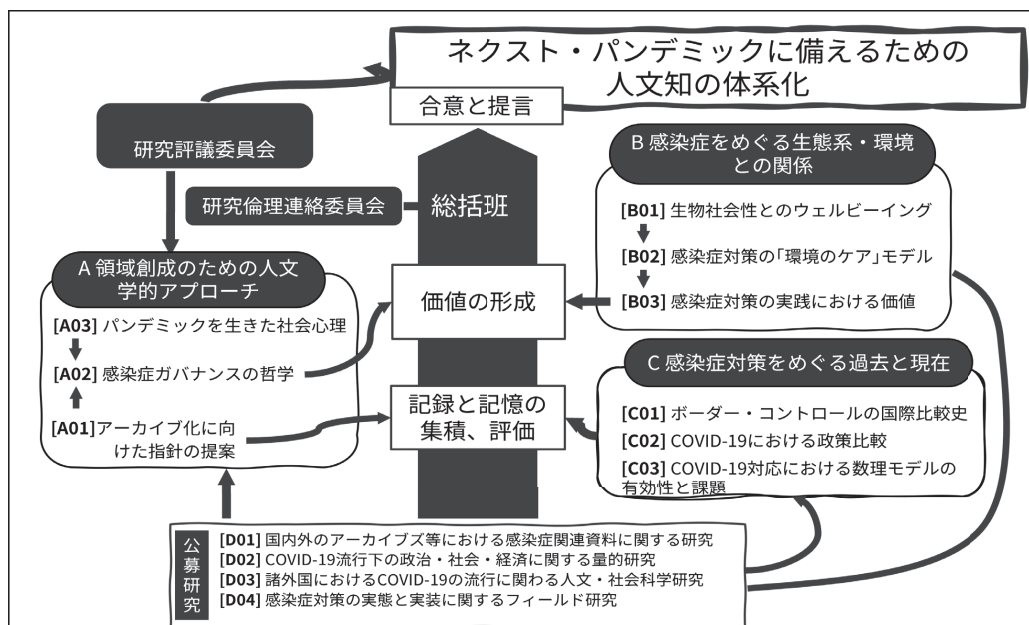
●研究の全体像

COVID-19（新型コロナウイルス感染症）のパンデミックは、さまざまな感染症の流行を抑制することに成功し、20世紀後半には感染症を過去の問題として捉えるようになっていた日本でも、感染症が依然として脅威となりうることを印象づけた。世界各地におけるCOVID-19のパンデミックの状況も一様ではなく、対策をめぐってさまざまな課題が明らかになった。

そうした課題は、医療や公衆衛生の枠組みからだけでなく、社会や文化、倫理、価値観などの問題からとらえなおす必要がある。人文学もこの課題に取り組み、社会の脆弱性や意思決定のプロセスに対しても知見を提供すべきである。そのためには、COVID-19のパンデミックをめぐる問題群を言語化し、その構造を明らかにする必要がある。また、感染症の流行をめぐる記録や記憶の継承や創造を調査研究の基盤とすべきである。

本研究領域は、COVID-19を中心に、それに新興再興感染症や顧みられない熱帯病（NTDs）を加え、人文学がイニシアティブをとり、医学・公衆衛生学、社会科学などとの学際的な連携を進め、人間社会と感染症の関係を根本から再考する。

ありうるべきネクスト・パンデミックに備える人文知を蓄積し、感染症を社会的文化的な文脈から捉え直す新たな学問領域として「感染症の人間学（Humanities of Infectious Diseases）」を創成する。



図）感染症人間学の創成のために

●本研究領域の現在性とポスト・パンデミック時代への知の継承

本研究領域は、「感染症人間学」（Humanities of Infectious Diseases）という人文学的知見を中核に据えた学際的な知の集積を目指す。

「人間学」（Humanities）という用語は、日本語では「じんかんがく」とも読まれうる。そのため、「人間学」＝「にんげんがく」＝「じんかんがく」は、感染症の流行が露わにした「人と人との距離」の問題、すなわち感染症のパンデミックの中で顕在化した社会的分断や隔離をめぐる倫理、個人の行動変容とその文化的背景、国家や地域をまたぐグローバルな人間関係の変容を考察する枠組みとしても機能しうる。

COVID-19がなくなったわけではない。人間や社会の側が理解のあり方を変えたことによって、流行は「収束」したかのようにように意識されている。そうした中で、パンデミックをめぐる記録の廃棄や記憶の忘却も急速に進んでいる。記録を記憶を保全継承することは、ネクスト・パンデミックへの有効な対策の一つである。そのためには、人文学がその特徴を活かして、さまざまな役割を果たす必要がある。

そうした研究成果を国内外に広く発信し、感染症に対する強靱な社会の構築に資する中長期的な知の体系を形成することはまさに喫緊の課題である。

この研究によって何をどこまで明らかにしようとしているのか

本研究領域の活動の柱は、以下の3点である。

- ①感染症が人類社会および現代文明に突きつけている問題群を、人文学を中心に可視化し、言語化する。
- ②学際的連携のもと、新たな研究領域として「感染症の人間学」を創成し、感染症と「共存」する社会の構想と実践に資する知の体系を構築する。
- ③人文学からの知見をもとに、感染症に対する社会のレジリエンスを高め、成熟しかつ受容可能な対策を提言する。

そのために、3つの戦略とそれに呼応した研究項目を設定し、研究を遂行する。

第1の戦略：感染症流行に関する「記録」と「記憶」の体系的蓄積と分析

COVID-19のパンデミックの中で進められた制度・政策、専門家の判断、社会的な反応、議論の過程をアーカイブズ学の手法により収集・保全する**研究項目A「領域創成のための人文学的アプローチ」**

（A01～A03）では、歴史学、哲学・倫理学、社会学、社会心理学を統合し、感染症をめぐる記録と記憶の枠組み、社会的価値の再構築に取り組む。

第2の戦略：社会的価値に関する学際的検討

感染症対策と深く関わる「自由」「責任」「ウェルビーイング」「ケア」などの価値について、社会学・倫理学・公衆衛生学から再検討し、持続可能な社会のあり方と個人の行動指針を構想する**研究項目B「感染症をめぐる生態系・環境との関係」（B01～B03）**では、文化人類学や社会人類学、熱帯医学の知見に基づき、感染症対策を生活者目線から捉え直し、レジリエントな社会の構築に向けた実践的指針を探る。

第3の戦略：地域・国際レベルでの政策提言と対話の構築

日本および東アジア諸国を中心とした事例分析をもとに、国際的に共有可能な政策提言を行い、国外の研究者とのネットワークを活用して、国際的な議論と協働の場を形成する**研究項目C「感染症対策をめぐる過去と現在」（C01～C03）**では、地域研究、歴史学、公衆衛生学の視点から、各国の政策対応や社会反応を歴史的・構造的に分析し、将来の感染症政策への知恵を導く。

計画研究による活動を活性化させ、より革新的なものとするため、計32件の公募研究を募り、AIやデータサイエンスを用いた量的分析、文学やアートを通じた感染症の捉え直し、さらには気候変動や家畜伝染病といった新しい課題に挑むフィールド研究など、斬新な視点や手法を導入する推進力とする。